
Gate User

カミカゼフロンティア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gate User

【Nコード】

N8674V

【作者名】

カミカゼフロンティア

【あらすじ】

今よりおよそ百年先の地球。世界的な天変地異、通称『ラグナレク』と呼ばれる大天災に見舞われた地球は、人類を含む多くの種が存亡の危機に陥った。しかしこの大災害は、辛くも生存をした人類と様々な種に、同時にある奇跡をもたらした。それは、今までどの種にも存在していなかった力——魔法の力の発現であった。

あらゆる生命が魔法に目覚めてさらに千年後の地球。再び文明を築き上げることに成功した人類は、国家間の争いなどを抜きにすればかなり平穏な生活を送っていた。そんな中、ある一人の少年シ

オン・アスタロトは、この魔法に支配された世界の秘密を知ることのできるというあるものを探し、世界中を放浪していた。果たして彼が追い求めるものとは一体……？

受験生のため更新遅れます。申し訳ありません。

推敲にかなり時間を要す性分のため、さらに更新が遅れます。

それでもいいよって思える寛大な心の貴方にのみおススメの作品です。（え

記憶の中で

「こんなものしか残せない、私をどうか赦してちょうだい……。愛するあなたには、もっと別のものをあげたかったのに」

優しく耳朶じだを打つ、しかしどこか悲しそうな声。心の内に直接流れ込んでくるような、心地よいその声の方へと振り仰いだ。しかし、まばゆい光にはばまれて、その顔を確認することは叶わない。何者かが釈然としない声の主は、そのままゆつくりと続ける。

「これを背負っていくあなたには、大きな苦痛が伴うはず。でも、使いようによつては、これは大切な人を守るための、強力な剣にも盾にもなってくれるわ」

やわらかな声音の主はそう言い聞かせながら、話を聞いている自分の頭をそつと撫でてくれた。懐かしい感覚に安心するも、自分へと一体何を託そうとしているのかがわからなかった。

思わず問いかけようとしたのだが、声を発するのはおろか、口を開くのさえままならない。まるで別の意思が、そうはさせまいと阻んでいるようであった。自分の体が自由にいかないことに不安がよぎるも、そのことさえ口にはできない。

するとその不安を感じ取ったのか、声の主はうるたえる自分を温かな抱擁で包み込んでくれた。するとその瞬間、それまでの不安が温められた雪のように、じんわりと溶けていった。その不思議な感覚と、抱かれた安心感にほっと胸をなでおろす。

そして最後に何か伝えるためか、ほんの少しの間をおいて、またゆつくりと声の主は言葉を紡いだ。

「願わくば、あなたの人生に守るべき大切な人が現れんことを」

その声が響いた瞬間、すべてが終わりを迎えた。

顔のわからない声の主は、もう一度ぎゅつと強く抱きしめてくれた。しかし、それきり包み込んでいてくれた腕を解くと、どんどんと離れていく。突然のことに再び不安がわきあがり、離れていくあ

の優しい、温かい声の主を追いかけてやうとするのだが、今度は足がいうことをきかない。

必死にもがいている間にも、どんどんその距離は開いていく。その差が離れていくに従って、周囲は声の主を覆っていた光を失い、次第に何も映さない闇へと包まれていく。

—— 待つて、お願いだから待つて！

周囲のことなど眼にもくれず、必死に声の主を引き留めようとする。だが、悲痛に叫ぼうとするも、やはり何かの意思が邪魔をしてか、声にはならなかった。

もうほとんど光は霞^{かす}んでしまい、混沌とした、何も見えないまでの闇が、先ほどまでいた声の主のいた場所を浸食をしていく。それでも声にならない声で、すぐるように必死に叫び続けた。まるで、親に置いていかれる子供のよう。

—— 嫌だよ！ 僕を置いていかないで！ 僕を独りぼっちにしないでよ！

それを最後に視界の周りすべてを、声の主とは全く対照的な、暗く、冷たい、何も与えてはくれない闇が、すっかり覆いつくしてしまった。

白き髪少年

——季節は初夏。乾いた涼やかな風が行き過ぎ、見渡す限り一面に広がる草原を優しく撫で、波のようにうねらせていた。雲ひとつない空で太陽の光はさんと照り、風と相まって心地よい気候を作り出している。

こんな日には澄み渡った空を見上げながら、弁当を片手に鼻歌まじりにピクニックにでも出かければ、最高であろう。しかし、天気など知ったことかとわき目も振らず、一人の少年が草原のただ中を駆けていた。……それも常人の走るといふ域をはるかに凌駕する勢いで。

彼は向かってくる風に、腰まである絹糸のような真っ白な長髪をなびかせていた。周囲をせわしなく見回す瞳は、ルビーを彷彿とさせる澄んだ鮮紅色をしている。小柄な細身に纏^{まと}うのは、真っ黒なロングコートと、折り目のきちんとしたこれまた同色のスーツ風のズボン。これから夏に差し掛かる時期だというのに、その様はかなり季節外れな格好であった。

そんな彼の中でも何より目を引くのが、手あかに汚れた茶色のなめし革で表装を施した、ずいぶんと分厚く、それも大判の本であった。少年が細身なために、余計と本が大きく見えてしまう。大人が持つにも重そうだったが、しかし彼は決して落とすまいと、さも大切そうにその本を抱えていた。

さて、少年はどちらかといえば可愛らしい、中性的な整った顔をしかめさせると、なおも驚異的な走りを維持したまま、本を持つとは反対の手でコートの懐より何かを探り出した。それは黄ばんだ羊皮紙で、その表面にはかすれたインクで、山や川の名前、はたまた村や街の名称が事細かに記されていた。見たところ、どうやらかなり精緻^{せいち}に描かれた地図のようだ。

その地図をしばしの間じっと見て、少年は何か考えるように「ふ

「む」と一つ鼻を鳴らすように息を漏らした。すると思いついたように、それまで鮮紅色の瞳に映っていた地図の向きを逆さまに反転させたではないか。地図でいう北を示していた針のような方位図の先が、少年側を指すように向きを変える。しかし、それでもまだ彼のお気には召さなかったようで、今度は右向きにくるりと回す。しかしそれでもだめだったようで、打って変って左向きに。そして拳句の果てには、何も書かれてはいない羊皮紙の裏側を見はじめる始末。

そして少年は、地図をくるくると回す作業をやめると同時に、急停止をした。弾丸のような走りを見せていたにもかかわらず、少年は息を乱す素振りさえ微塵も見せない。加えて、大地を足先で穿^{うが}つこともなく、物音さえ立てはしなかった。そして彼はほっそりとした指先をあごへとあてがうと、自分の置かれた状況を冷静に分析した。

「ふむ。どうやら道に迷ったようですね」

まるで他人がその状況に置かれたのを達観するようで、そしてどこか自覚していないような響き。何か目印がないものかと周囲を見渡すのだが、今までその中を駆けていた一面の草原以外に何も見当たりはしない。

考えあぐねるように彼は腕を組むと、どうして迷子などになってしまったのか、この場所へと至った経緯を回想し始めた。

「ええっと。最後に村を出て、それから峠を越えまして。……そこで珍しい鉱石を見つけて少し道を外れて。そこでまた面白い葉草を見つけて、また少し道を外れて。そうしていたら、村を出立したときとよく似たような道に運よく出たから、それに沿っていたらなぜかここにきて……。一体僕のどこに不手際があったんでしょうか？」
全くもって不手際だらけである。

しかし、そのことには全く少年の方は気がついてはいないようであった。長い白い髪に隠れたこめかみをぼりぼりと掻きながら、誰かに問いかけるような口調で漏らす。だが、こんなただっ広い草原

に、彼の話を聞いている者などがいるはずもない。しかし、それでもなお懸命に迷子になった原因究明に彼は励んだ。

そして何とはなしに彼は地図を取り出したのだが、それを見た瞬間に、ひらめいたようにボンと軽く一つ手を打つ。

「そうか！ 地図がこんなに読みにくいせいで、僕は迷ってしまっただんですね。全く……こんなものもう要りません」

全ての謎が解けたと言わんばかりに快活な声をあげた少年。そして誰がどう見てもめちゃくちゃな結論に落ち着くと、それまで頼りにしていた地図を惜しむこともなく、思い切り投げ捨てた。理不尽な言いがかりをつけられ、役立たずと判断された地図。風に煽^{あお}られながら虚空の彼方へと姿を消していくその様は、何とも哀愁漂うものであった……。

「ふーむ。また野宿ですか。今日こそは、次の街に着きたかったのですがね」

地図が飛んでいくさまを眺めつつ、どこか忌々しい口調で少年は愚痴のようにこぼす。まぎれもなく悪いのは自分だというのに。あれだけ明細に描かれた地図で迷うのもどうかとも思うのだが、こうなっては仕方がないと割り切って考えるほかない。薪を拾い集めるために、ロングコートの袖をはためかせ、ゆっくりと彼は歩き始めた。

まだ日も高く日没までには大分時間もある。だが、こつ木が見当たらないとなると、薪集めは骨が折れそうだと踏んで、早々に薪の収集に打って出たのだ。幸い周辺の草は柔らかいため、刈り取って重ねれば寝床には難儀はしそうにはないとも見ていた。

いやはやこの少年、こういう部分には頭が回るというのに、どうして道などに迷うのかかが甚だ疑問に思えてくる。

さて、そうして彼が手ごろな朽ちた木片でもないかと、不機嫌そうな面持ちで草をかき分けていた時だ。

「————きゃあああああ——！」

突然の悲鳴。それも甲高い、女性のものらしき声。距離がここよ

り離れているのか、少し霞かすんだ声であつた。これを聞きつけた彼は、草の合間からひよっこりと頭をのぞかせる。まるで音に反応した、白い毛を尾に引き、紅い眼をした草食動物のように見える。

普通、悲鳴というものを聞きつければ、不穏なものを想像し、後の行動は大体二つに絞られる。好奇心が勝つて、不安を抱えながらもそちらへと向かうか。はたまた面倒事は厄介だと、その場からそくさと退散するかだ。

しかし、少年はその前者にも、後者にも当てはまらなかった。平たく、そして悪く言つてしまえば、『普通』ではなかったのだ。

悲痛な声を耳にした途端に、少年は嬉々とした表情を浮かべた。重ねて言うが、彼の中には好奇心を焚きつける、面倒な野次馬根性は据わつてはいない。ではなぜ、そんなに喜んだかといえは……。

「なんと！ こんな場所へ僕以外にも人がいたとは。これで道を尋ねることができそうです」

なぜ女性がこんな辺鄙へんぴな場所で悲鳴を上げているのか。その女性が、一体どんな状況に置かれているか。そんなことなどは、二の次どころか一分も考慮に入れてはいない口ぶりのまま、少年は小躍りをする。上手くいけば今日を終わりに野宿は済みそうだと、思わずそれまで拾い集めていた木片を盛大に投げ捨てた。

そして、それまで小脇に大事そうに抱えていた、あの茶色の革表紙の大きな本を目の前に取り出す。ずっしりとしたその重みを細い腕で支えながら、慣れた手つきで目当てのページを一挙に開く。

そこには、円や不規則な曲線で描かれた象形文字——いわゆる魔法文字が、ページを覆い尽くさんばかりに羅列をしていた。そして愛でるようにその一つを指先でそつと撫でると、鮮紅色の瞳を細め、静かな声でその名を詠唱した。

「ゲイル」

響きのよい声音が消えると同時に、呪文が呼応するようにドクリと鼓動を上げ、目覚めをむかえる。先ほど撫でられたページの一節がまばゆく光を放つと、少年の白い長髪と、身に纏っていた黒の口

ングコートは、虚空でふわりと舞うように浮遊を始めた。それを視界の端で捉えると、口角をふつと緩め、彼は地を軽く蹴る。

瞬間、草原へ至るまでに見せていたのと同じ猛烈な走りで、彼は再び駆けだした。草が、背の低い木が、野生の動物が線と化して流れていく。一陣の風に変貌した彼は、耳元で逆巻く風で、まだ響く悲鳴を聞き逃さぬように細心の注意を払いながら、草原のただ中を流れるように走っていった。

白き髪の少年（2）

数秒ほど走ったであろうか。少年はちょうど草の途切れた、土の露見する小さな広場のような場所へと出た。そして、ある一団に出くわした。少年はそれを見つけて先ほど同様急に止まる。

もちろんこの時には、物音一つとして立てはしない。実距離にしておおよそ七、八百メートルほどを、文字通り目にもとまらぬ速さで駆けつけたのだが、やはり彼は汗一筋さえ流してはいなかった。

さて、少年はその集団を見やったのだが、どこかおかしいと感じていた。なぜならば、複数の筋肉隆々とした屈強そうな男が数人——正確には十三人が、ひざまず跪いた一人の女性——見てくれから察するに十六歳くらいの少女を円状に取り囲んでいたからだ。

幸い、男たちの方も、少女も、少年の接近には気が付いていない。彼の唱えた『ゲイル』は、移動時、および静止時ともに音を立てないという効果があった。加えてある程度距離を置いて離れたため、白髪の少年の存在を誰も感づいてはいなかった。……あらかじめ言うておくが、少年にこの時、おかしな集団を物陰に隠れて観察しよううだとかいう、起こってもよさそうな考えは全くもって浮かんではいなかった。距離をおいて止まったのもただの偶然の産物にすぎない。

——家族で出かけに来たわけではなさそうですね。

可能性のもつとも低そうな選択肢を上げて、この集団の意義を考察しようとする。だが、やはり考えるのは面倒なので、少年は道を訊いてさっさとここから退散することにした。

身を隠すでも、警戒するでもなく、街の路上を進むように堂々と歩みを進め、一番手近な男の肩を無粋に軽く叩いた。

「あのー。すみません」

「うおっ！」

「うわっ！ 何をそんなに驚いているんですか？」

突然少年が現れ、おまけに不意を打たれるように声をかけられたものだから、少年が呼んだ男を含め、全員が肩をびくりと震わせた。頑強そうな男たち一同、ポカンと呆けた表情で少年を眺める。

一方の全員の注目の的になった少年も、驚いたように鮮紅色の瞳を大きく見開いていた。自然に話しかけたつもりなのに、呼びかけた男があんまりにも大声で驚いたものだから、逆に自分も驚いてしまったのだった。……実に間抜けである。

「な、何者だ。てめえ？」

突如として現れた少年を訝しみながら睨みつつ、平静を何とか保とうとする話しかけられた男。声が上ずるのを抑えながら、少年へと問いただす。

一方の少年は、目の前の男の手にした物を見て、表情に焦りの色を露わにした。なぜならば、目の前の男は手に鋭利なナイフを固く握っていたからだ。いや、目の前の男どころか、彼を含めた誰もが各々、小ぶりの斧や太刀などを携えている。

極め付けに、彼ら全員の屈強な体には、斬撃で負ったような深い傷痕がそこかしこに刻まれていた。目の前の男もちろん例外ではなく、荒く切った黒の髪の間髪からのぞく右目には、大きく縦に抉ったような斬り傷を負い、そのために完全に潰れている。

お世辞にも柄のいいとは言えない彼らを見れば、大概どんな集団かが安易に予想がつくというもの。

「僕としたことが……」

白い髪の少年は、自分の迂闊さを恨むように言葉を漏らした。しかし、後悔をしてももう遅い。過去の失敗の修正などは不可能なのだから。

少年の息を呑む声に、話しかけられた男は余裕を取り戻したように、口角を吊り上げて、不気味な笑みを浮かべた。

それを見た少年は益々慌てふためき、誰もがこの苦しい状況を打開しようとするのと同じく、弁明しようと急いで口を開いた。

「これは失礼いたしました。僕は、シオン・アスタロトという者で

す。運悪く旅の道中に迷ってしまい、途方に暮れていました。しかし、まさに不幸中の幸い。そちらの女性の悲鳴のおかげで、あなた方の居場所を知ることが出来たのです。もしもよろしければ、僕に道を教えてはいただけないでしょうか？」

「……………」

——あたりに沈黙が流れたのは言うまでもない。屈強そうな男たちは、目前で深々と頭を下げて頼みこんできた少年を見て、困ったように互いに顔を合わせるしかなかった。

白髪の少年——もとい『シオン』からは、てっきり悲鳴を上げた後に、すっかり聞きあきたお決まりの命乞いの台詞でも聞けるものだと考えていたからだ。

しかし、このシオンとかいう得体のしれない少年は、泣きわめくどころか、丁寧な、それも滞ることもなく、ずいぶんと雄弁に自己紹介と、ここへと至った経緯を語ってくれたのだ。

ところが実際のところ、シオンの方も気が気ではなかった。男たちがナイフを構えていたのを視界に認めた瞬間、どうやら男らは、自分の不躚^{ぶしつけ}な態度に、怒り心頭しているものだと感じていたからだ。このまま言いがかりをつけられて、そろそろ残り少なくなってきた大切な旅費を、寄せなどと言われてはたまったものではない。これだけ誠意を見せて謝罪をし、身の上を話したのだから、男たちも慈悲を垂れて親切に道案内をしてくれるであろうと信じて疑わなかった。

ところが、一向に赦しのニュアンスを含んだ言葉はおろか、下げた頭の上からは、何も聞こえてはこない。そのため、シオンもある意味で、男たち同様に途方に暮れていた。

噛み合っていたかのように見えた会話は、実のところ両者の意とするところに、全然そぐわないものであったのだった。

「てめえ。俺たちが何者かがわかっているのか？」

頭上から脅すような、それでいて尋ねてくるような声が聞こえる。ここは丁寧に受け答えをしておくのが、最善の方法だと判断したシ

オン。彼は、頭をおもむろに上げると同時に自信ありげに胸を張り、そしてどこかもったいぶるように答えた。

「当然です。あなた方は……………旅の大道芸の一座ですね。ナイフなどの鋭利な物を扱ったジャグリングを一番の見せ物にし、そちらの女性は観客の代わりに悲鳴を上げる役を……………」

「ちげえよっ！！」

シオンは得意げに話していたのだが、言い終わらないうちにすかさずツツコミが飛んでくる。自分の完璧だと思っていた推論が全力で否定され、彼は驚きを隠せないまま「ええっ？」と、素っ頓狂な声を上げた。

そして、ほっそりとした指をあごにあてがい、困ったように「ふーむ」と息を長く吐き出すと、シオンは熟考する。しばし、うんうんという唸り声とともに思考回路をフル回転させていたのだが、その間あの柄の悪い男たちは、律儀にも彼の答えを辛抱強く待ち続けていた。

ついに、それまで苦悶としていた表情が一転。整った細面をシオンは明るいものに変えた。ようやくわかったのかと男たちの方もほっと胸を撫で下ろす。そしてシオンは堂々と口を開いた。

「やっとわかりました。あなたたちは……………包丁などの刃物を専門に扱う商人ですね。野菜か、果物か何かを目の前で実演して切り刻んだのです。すると、そのあまりの切れ味に驚き、思わずそちらの女性は悲鳴を上げてしま……………」

「だああああ！！何をどうやったら、そんな答えが出てくるんだあああ！！」

シオンが話しかけ、そしてなおも継続して話しをしているあの右目に大きな傷を負った男が、腹の底から、さも苛立たしそうに、猛り狂ったように声をあげた。地面が割れんばかりの声とは、おそろくこういうのを言うのだろうとシオンは初めて思い知り、とても貴重な体験が出来たと感じていた。

ついに我慢の限界。先頭だってシオンと受け答え（まともに成立

はしていないが）をしていた傷の男は、たくましい拳を高々と突き上げ、聞いて驚けと言わんばかりの大音声。

「いいか、よく聞け！ 俺たちは偉大な盗賊一家『黒い鷹』だ。そしてこの俺は、何を隠そうこの一団を率いるリーダー、ダコタ様だ。よく覚えておけ！」

盗賊が偉大かどうかはさておき。ついに名乗りを上げた……というよりは、上げざるを得なかった黒い鷹のリーダー、ダコタとやら。ついに自分たちが盗賊だと、このシオンという少年へと教え込んでやったのだ。次に響くは、シオンの悲鳴か、驚きの声か、はたまた――。

様々な憶測、それもシオンが一般人ばりの反応を示すことを予想したダコタは、先走って「ふっふっふっ……」と勝ち誇ったように低い笑いを漏らしていた――のだが。

「はあ、なるほど盗賊ですか。だから武器を……ふむふむ」

半分感心、半分納得といったふうに、シオンは腕組みをしつつ、小さくうなずいていた。乾いた風が、白け切った空気の広がる彼らの居場所を、虚しい音とともに吹き去っていく。

――ブチッ！

何かが切れるような、そんな不穏な音が響いた。

不審に思ったシオンは、きょとんと小首を傾げて鮮紅色の瞳を音源の方へと差し向ける。

そこには、額に青筋を浮かべ、頭と口からもうもうと蒸気を吐き、目を烈火のごとく怒らせた盗賊団の屈強な十三人衆がいた。彼らがこんな反応をするのも無理はないが、それでもシオンはダコタたちが怒りに満ちているとは思ってもいなかった。

ただ、口から煙を吐いて、目が怪しく発光しているので、以前訪れた村で建造され、住民の生活の手助けをしていた石造りの人形――

――ゴーレムによく似ているなあと感じていた。こんな難しいものまねを皆が出来るというので、やはり彼らは、大道芸の一団ではないのかと再び疑心したりもしていた。

それほどまでに、シオンの相手の怒り感知センサーは恐ろしいほど鈍かったのだ。

「よくもまあ、コケにしてくれたなあ……………死んで詫びやがれ、コゾウ！」

ダコタはついに動き出し、シオンの心臓めがけて鋭い一突きを繰り出す。ナイフの切っ先が空を切る、ヒュツという小気味いい音が響き、あわてて後ろに跳躍をして避けるシオン。

白き髪の少年（3）

「うわっ！ 僕が何か、気に障る事でも言いました？」

「十分すぎるほど言っとなるわい！」

野太い怒りを含んだ声で応じながら、ダコタは後方へと飛び退くシオンを逃すまいと斬り込んでいく。一薙ぎ、また一薙ぎと休む間もなく強烈な斬撃を浴びせるのだが、シオンに当りはしない。

動くのには適していない重いロングコートを身にまとい、小柄で痩せ気味の体つきから、一見やわに見えるシオン。しかしながらその動きは、裏腹にも軽快そのものであった。

これには、場面によっては、人を斬らざるを得ない盗賊稼業を長年してきたダコタも、面には出さないものの内心では舌を巻かずにはいられなかった。

実際シオンの表情は先ほどの柔和で、どこか腑抜けたものとは全く違っていた。鮮紅色の瞳をずっと細め、太刀筋を読むのに余念がない。

「やるじゃねえか、ボウズ」

殺気を含んだ低い声で、感心したようにダコタはつぶやく。しかし、シオンは表情そのままに何も返さなかった。

一呼吸おくためか、ダコタは追撃の手をとめた。シオンはそこから距離を空けるように、もう二回ほど後ろへと跳躍する。同時に彼の長い白い髪がゆらりと揺れ、その合間からのぞく眼で牽制するけんせいように、ダコタをきつと睨みつけた。

しかしながら、そんな眼差しを受けてもダコタは憚然としたままで、「ふっ」と鼻であしらう。

「いい眼だな。だがてめえの負けだ」

唐突な事にシオンは眉をひそめるも、ナイフの切っ先を向けて対峙するダコタが、周りをよく見ると視線で語り、無精髭の伸びたあごをわずかに上ずらせた。

彼に促されるまま周囲を見やると、いつの間にか盗賊の十三人衆が、まるで円を組んだようにシオンを取り囲んでいた。まんまと誘導させられていたのかと、今更になって気がつく。

「はて、僕をどうする気です？」

とぼけたような口調。しかしその声は、先ほどまでの朗らかだったシオンの声からは、想像もつかないほど抑揚のない、冷たいものであった。

「無論、俺たちを散々バカにしてくれた礼に、なぶり殺しにしてやる……………と言いたいところだが、それじゃあ余りにてめえが不憫だと思つてなあ」

そこまで言いかけると、ダコタはニタアツと笑つて見せた。黄ばんだ歯が口からのぞき、右目の大きな傷痕が別の生き物のように不気味にうねる。

「その場に膝を着いて謝りやあ、命だけは助けてやろう。ただし、その時は奴隷として売つ払つてやるがな」

腹を空かせた猛獣が吼えるような声で、「ぎやはは」と笑つて見せるダコタ。彼のように声には出さないものの、シオンを囲う全員が似たような笑みを浮かべ、暗い陰惨な眼を差し向けていた。

しかし、そんな状況にあつてもなお、シオンは表情を一つも崩しはしなかった。代わりに「ふむ」と鼻を鳴らすように相槌を打つと、再び尋ねてみる。

「なるほど、僕のことはよくわかりました。それではあちらの彼女は どうするおつもりで？」

ダコタのわきから、ちらと見える少女。金糸のような豊かなプラチナブロンドの髪を腰までのばした彼女は、海原を思わせる紺碧こんぺきの瞳を不安げに揺らめかせていた。

口と手足を縄で縛られており、声を発するのはおろか、身動きさえ取れない様子だ。どおりで到着してから声一つ聞こえないわけだと、シオンはつぶさに彼女を視界の内に捉えていた。

「んなもん決まってるだろう。散々俺達で犯した後で、お前と同じ

ように奴隷市に出してやるさ」

下品な声音が響くと、再び騒ぎ立てるように笑い始めたダコタ。

この声を耳にするや、少女は肩をびくりと震わせ、血の気の引いた表情に変える。そして嫌だと叫ぶかのように、力なくふるふると首を左右に振った。そしてすぐるような切迫した眼差しをシオンへと向ける。

だが、ダコタの話聞いても、少女の語ってくるような視線を受けても、やはりシオンは対応そのままに、「ふーむ」と少し長めに息を吐く。そして、これからの対応を決めかねているように腕組みをして見せた。

シオンの次の言葉をダコタは、じつと堪えるように待ち続けた。目の前のいけ好かない少年が、英雄気取りで自分たちに齒向かうもよし。また、死への恐怖に駆られて涙を浮かべつつ、命を惜しんで屈服しようとも、どちらでもよかったからだ。

前者であればこのままくぶり殺せばいいし、また、後者であれば絶望した面を眺めるのも悪くはないと、心の内に思い描く。それほどまでにこのダコタという男は、人の命を奪い去ることを愉しみ、追い詰めた者が苦痛に喘ぐ姿^{あえ}を見ることが昂揚^{こうよう}を覚えるような、冷酷極まりない人物であった。

そうして待つことしばし。考察に耽^{ふけ}っていたシオンは、遂に口を開いた。

「この人数差では死ぬのが目に見えています。僕は死にたくはありません。先までの非礼を詫びますから、どうか命だけはお助けを……」

ずっと凜としていたシオンのものとは思えないほど、その声は弱々しいものへと豹変し、歪んだ赦^{ゆる}しを乞うものであった。

待たされるという鬱屈した状態から一挙に放たれたダコタは、こぞとばかりにほくそ笑む。奴隷になるか、はたまた死ぬかという究極の判断を下したシオン。そんな、彼の満身創痍となった心を完全に屈服させるため、最後の仕上げとばかりに、これからシオンが

行き着くであろう道程をわざわざ語ってやる。

「ギヤはは、いい判断だぞボウズ。これからてめえは売られるわけだが、まあそう心配するな。てめえはなかなか見てくれがいいから、金持ちのババアがすぐ愛玩動物ペットに飼ってくれるさ」

まるで見せ物を嘲るように、ダコタはただぎらついた眼でシオンを笑い続けた。

一方で少女は、シオンの言葉を聞いて愕然とし、落胆を感じずにはいられなかった。先の失われた人生への絶望。これから男たちにされることへの恐怖。そしてそれらを凌ぐほど強く感じたのが、怒りであった。

あのシオンという少年は自分を生かすために、躊躇ためらいもなく、藁にもすがる思いだった自分を切り捨てたのだ。虚しい結果に終わったとしても、少しくらいの抵抗でもしてくれていれば、まだ自分はもう少し素直にこの状況を呑み込めただろうに。だからこそ、己の保身のための選択をした彼が赦せなかったのだ。

絶望、恐怖、怒りが一緒くたになって、頭の中を回りながら少女の内を支配していく。涙の浮かぶまま強く、しかしそれは侮蔑にも似た眼差しで、少女はシオンを睨みつける。だが彼は俯いてしまい、垂れた長い髪のせいで表情は隠れてしまっ、読み取れなかった。

さて、ひとしきり低い笑いを終えたダコタは、気まぐれからであろうか、唐突にシオンへとある提案をする。

「なあボウズ。このまま売られるのもあれだろうから、俺たちがあの女を使い終わったら、一度だけお前の自由にしていいぞ。その代わり、俺たちに謝った後に、『どうか僕に、あの使用済みの汚い女を使わせて下さい』とちゃんと言うんだぞ」

おどけたようにシオンの言葉を真似たセリフに、遂には『黒い鷹』の全員が笑いだした。「お頭、最高っス」などという輩までいることから、気の知れない、ダコタとまさに同類の連中であると容易に判断が出来る。

「さあ、どうするんだ。んん……？」

どこか促すような口調で、シオンへと問いかけるダコタ。そんな言葉に気圧されたのか、シオンはおずおずと「……わかりました。言います」と消え入りそうな声で応えた。

彼の言葉に、さらに賊たちは刺激されたように馬鹿笑いをし、一方で少女はさらなる怒りを含んだ、濡れた紺碧の瞳を向けた。そして、シオンはすつと息を吐くと、響きのいい声音で、大きく叫んだ。「僕は決してあなたたちのような、浅ましく、下劣で、醜悪なものには屈しません。そして、その彼女にも指一本として、あなたたちには触れさせはしません」

無論この言葉を聞き、誰もが驚いたのは言うまでもない。伏せていた面をシオンは上げ、不敵な笑みを浮かべてダコタに向き直る。鮮紅色の瞳が、賊たちを射抜くように差し向けられた。

「ちっ……芝居を打ってやがったのか。なめやがって！」

今まで遊ばれていたことが解った盗賊どもは、再び怒りを露わにして怒鳴り声をあげた。

そしてダコタの「殺れ」の声を合図に、各々獲物の切っ先を中央にたたずむ少年へと向けて、突進を開始した。

シオンは、殺気だった様子で突っ込んでくる賊を見ても、悠然とした態度は崩さない。そしてそのまま、小脇に抱えていた、大判の魔法文字の書かれていた本を開き、囁くように詠唱をした。

「ゲイル」

それを言い終わるか否かという間に、シオンはその場から忽然と姿を消した。実際は高速で移動しただけなのだが、常人ではその姿を捉えることすら難しい速度のため、ダコタたちにも当然可視など出来やしなかった。

一挙に男どもの懷を舞うようにかいくぐったシオンは、少女を一瞬で拾い上げ、そして両手に抱きかかえる。賊から今度は距離を大きくおくと、静かに急静止をした。少女の手足や口を縛っていた縄に触れると、その縄はどこからか切れ、ポトリと地面へと落ちる。

急な事に少女は事態を全く飲み込めず、「え？ あれ？」と素っ

頓狂な声をあげて、目を白黒させていた。

そんな彼女を見つつ、

「もう大丈夫ですよ」

と、シオンはいつもの物腰の柔らかい声で少女に語りかける。

この声に気がついたのか、『黒い鷹』十三人衆はそちらへと振り返る。「いつの間に……」「何をしゃがったんだあのコゾウ」と、驚きの声が、あちらこちらから、ちらほらと漏れ出す。

「ん？ ただ僕は『強風』^{ゲイル}の力を借りただけですよ」

まるで子供にでも教えるかのように、人差し指をピンと立て、につこりとほほ笑むシオン。

「畜生め。まさか、魔導師^{ウィザード}だったとは。ガキだと思って油断した」

眉間に深くしわを入れ、自分の過失を忌々しげにダコタはうめくだがいつまでもこの残忍な男が、自責の念に駆られていようはずもない。すぐさま「散開して、逃げ場をなくせ」という指示を出し、それに応じてメンバー全員が散り散りに広がっていった。

白き髪の少年（４）

　　またも追い詰められることになるかと予想してか、少女は顔を青ざめさせる。すると何を思ったのか、シオンはゆつくりと少女を地に降ろした。そして自分よりも幾分も華奢な肩を両手で支えるように持つと、少女を自分の方へと向き直らせる。

　　「いいですか、落ち着いて聞いてください。ここから後ろの草原へと逃げ、身を隠してください。追っ手は絶対に一人として貴女の方へは通しませんから」

　　どこにそんな自信があるのかとも問いたくなるも、不思議とシオンの言葉は少女を温かく包み込むような、そんな安心感があつた。しかし、「でも……」と、食い下がろうとする少女。状況からみて一人が相手を出来る数などではないため、自分も加勢しようと考えたのだった。

　　そんな彼女を遮ると、シオンはコツリと互いの額を重ね合わせ、息のかかるほど近い距離で紺碧の瞳を覗き込んだ。

　　「大丈夫です。僕は約束をちゃんと守る男ですから」

　　告げるや否や、いたずらをした子供がするように、シオンはくすくすと小さく笑う。これを聞いて、少女はぽかんと呆けたような表情を見せた。しかしことは急いている。そのため、シオンはすぐさま少女を海原がごとく、一面に広がる草原へと逃げるように、少し強めにその背中を押して促した。ちらちらと何度か不安げに振り向きつつ、柔らかい草に足を取られながらも、走り始めた少女。「大丈夫ですよ」とでも語りかけるように、彼女を見てシオンはいつも通りに微笑む。

　　だが彼は、急に何かを思い出したかのように、長い金髪を揺らしながら駆ける少女に、声をかけてしばし引き留めた。

　　「ああそれと……絶対に後ろへは振り向かないでくださいね。それと、耳をふさいでおくことをお勧めします」

もうその眼も、声音も笑ってなどはいなかった。ダコタのように、殺しを一種の享樂とするような、邪念を含んだものとは全く対照的な眼と声。言うなれば、目前の敵を殺戮^{さつりく}することだけに目標をおいた、ただ純粹で、そして真っ直ぐなものだった。

少女は気圧されるように、これにもただうなずくしかなかった。急に露わになった殺気で研ぎ澄まされた彼に、思わずうすら寒いものが内を過ぎて行く。

同じ人物のものとは思えないほど冷めきった鮮紅色の瞳で、少女の怯えたような様子をひとしきり黙って見やると、シオンはそれきり振りかえることはなかった。

「さて……」

一息つくように漏らすと、向かってくる賊たちを鋭く睨むシオン。わきに抱えていた茶色の革表紙の詠唱本^{スベル・ブック}をおもむろに開く。そして、不規則な形状の魔法文字が敷き詰められたページの中から、詠唱をするものの一つを選ぼうと、目を走らせた。

進撃するダコタはシオンの動きを見て、討ち取ったと思い、口元を歪めた。

魔法は通常、発動するにあたって呪文^{スベル}を唱える行為が必要である。人間の所有する魔力だけでは、火を起こすことも、風を吹かすことも、水を飛散させることもかなわない。ではどのようにしてそうした魔法を使用可能にするかといえば、自然界に散在する様々な『属性マナ』と呼ばれるものを、呪文で無理やりに呼び寄せて、凝集した上で解き放つのだ。

土を固めたくば地のマナを集め、電撃を放ちたくば雷のマナを手繰り寄せる。といった具合に、使用するものに見合ったマナを集めることで原則としてはどんな魔法をも使用することが出来る。

しかし、一般的には呪文を詠読し終わるまでには相当の時間がかかるため、発動までに大きな隙が出来ることが多い。加えて、平静な精神状態を保つことができなかったり、呪文を読み違えば、最悪発動さえしないという状況にも陥ってしまう。

ダコタ率いる賊の動きは、一見すればただの突進にしか見えない。だがこれは、集団で呐喊とつかんすることで相手に殺気で威圧を与えて精神状態を乱し、そして発動までのタイムラグを狙って相手を打ちのめすという、彼らが今まで対峙をしてきた魔導師ウィザードには、かなり効果的な戦術であつたのだ。

——だが、ダコタたちが対峙をしてきたのは、あくまで『一般的』な魔導師にすぎなかった。

シオンに目前と迫った賊の内一人が、「とつたあ！」とだみ声で吼え、小斧の切っ先で袈裟けさがけに斬ろうと振りかぶった。しかし、賊の鬼気とした表情を見ても、シオンは眉目を一部も動かさない。そして、口を小さく開き、静かに魔法の名をそつと囁いた。

「……クレイ・ニードル」

刹那、シオンの足元の地がもこもこと蠢うごく。と同時に土くれは一拳に膨れ上がって塊を生じ、ねじ曲がった螺旋らせんを描いて密集する。そして——。

ドスリ。

重たいものを刺した時のような音が耳朶を打ち、その異様な物々しい響きに、突っ込んでいた賊の全員が足を思わず止めた。

「おい……嘘だろう？」

誰かが掠れた声を漏らした。そこには、三メートルは優にある、根元は巨木の幹のように、しかし先端はまさに『針』のように尖った土が、先陣を切っていた男の胸を深々と貫いていた。によつきりと大地から生えたその鋭利な土に串刺しにされた男は、傷口から血飛沫しぶきを噴き、礫はいつけにでもされたように力なくだらりと四肢を垂れ、口元からもこんこんと血を吐きだしていた。絶命前の刹那けいれん的な痙攣けいれんが、びくりと体を一度大きく揺すったが、それから二度と動くことはなかった。

瞬時に絶命した仲間を誰もが、信じられないとでも言うように瞠もく目して視界へと映す。予想だにしない事態に、賊どもはうろたえつつ、そのまま視線を巨針の根元にいる少年へと移した。

そこにはやはり一様な表情のまま、殺気を含んだ洞窟のように暗い鮮紅色の瞳で、賊を捉え続けるシオンがいた。

「もうおしまいですか？ 威勢の割には、ずいぶんと淡泊な攻撃ですね。…………… それでは、今度は僕が攻撃をさせてもらいますよ」

まるでチェスで順番が回ってきたかのように、相変わらず単調な声で言うと、シオンは再び「クレイ・ニードル」と小さくつぶやいた。

彼の近くにおいては二の舞になるとでも思ったのか、賊たちはシオンから我先にと距離を取り始めた。

しかし、これもシオンにとっては予想の範疇はんちゆうのことであり、逃げおおせようとした一人に狙いを定める。そして、視線の先の男に向かって、指先を軽い調子で振りおろした。

すると、今度はその男の足元の土が、まるで命を与えられたかのように、彼を取り囲む形で隆起をし始めた。

「う、うああ……………」

恐怖のあまりに引きつった声を上げる男。焦点の定まっていない不安定に揺れ動く目は、しかしながら、前方で地が動きまわるという異常な光景をしかと捉えていた。目の当たりにする状況に、すっかり彼は足がすくんでしまっていた。

「馬鹿野郎！ 逃げろ！」

リーダーのダコタの叫びが届く前に、土くれは再び渦を巻き、針の形成に取りかかる。しかし先と違って、今度の針は一本で目標を貫くためのものとは違った。小ぶりの細い針（とはいえども一メートル近くある）が数十本、次々に不気味な破裂音にも似たのを響かせて、地面から生えてくる。まるで針で出来た檻おりのように包囲すると、中心にいた男をめった刺しにするため、鋭い土くれたちは彼に向って殺到していった。

一刺し、一刺し、また一刺し——。肩へ、胸部へ、頭へと——。

複数の細めの針は、重苦しい音ではなく、ぐちゃりという肉を貫

く音を生々しく、その場にいた全員の耳に伝える。――それも、何度も。

「あああああ――！」

体を突き刺されるたびに想像を絶する痛みが走るためか、男は断末魔の叫びをあげる。血だるまになった彼は、それでも痛みから逃れようと身体が反応するせい、不自然な態勢にのけ反る。しかし大地はお構いなしに、そんな彼を容赦なく追い立てた。

叫んでいたのも束の間で、もう咽も貫かれたのか、口から漏れてくるのは、傷口から空気の漏れ出るひゅーひゅーという変な音と、同時に吹き散らされる鮮血だけであった。

二人を見せしめにでもするように、まざまざと惨殺を繰り広げられ、もう賊の中には平然としていられるものは、当然としていなかった。

「ひ、退け！ 退け！」

ダコタは怯えきった声で喚くように命じると、血相を変えて背を向けて逃げ出す。誰もが悲鳴を上げて、後方に広がる草原へと、蜘蛛の子を散らしたようにばらけて行く。

「おやおや。どこへ行くつもりですか？」

唯一、表情を一つとして変えないシオンは、近所の住民に出かけ先でも訊くような、軽快な声を発す。そしてすぐさまスperl・ブツクの別ページを開くと、その一節を細いしなやかな指先でなぞった。「グラス・ハング」

今度は一人のみに焦点を当てるのではなく、逃げおおせようと全速で駆ける全員へと眼を向けるシオン。そして指を振り上げると、空気を薙ぐように横一線を描いた。

キーンという金属音にも似た高い音が響くと、草原全体がざつとざわめいた。風はほとんど吹いてはおらず、紛れもなく、シオンの魔法と命令を受けた草々が応えたためだ。

シオンの意思を酌んだ草たちは、その細い一本一本を絡み合わせ、淡く紐のようなものを作り――その紐もまた織り合わさって、淡

い緑の縄を須臾^{じゆ}にして完成させた。

そして草の縄は躍動すると、地べたを這うように波線を描いて、賊に飛びかかった。ある縄は鞭のようにしなつて脚を打ちつけて態勢を崩させ、またある縄は蛇のように絡みついて転倒をさせる。不意に足を取られたために、地面に強制的に伏せられた賊をよそに、縄は体を捕縛しにかかる。

しゆるしゆると音を立て、腕や胴に次々に巻きついていく。それを目の当たりにしてパニック状態に陥った彼らは、「ひい」と情けない悲鳴を上げて何とか逃れようとする。

血眼になつて得物を振りかざして縄を裁断しようとする者、縛られた体をめちやくちやに揺り動かして振り解^{ほど}こうとする者。しかし、草の繊維はかなり丈夫で、加えて何重にも連なっているために彼ら在必死に切り裂こうとしても、また腕力で引きちぎろうにも全くもつてかなわない。

最後の仕上げといわんばかりに、縄は賊たちの体のある部分へと狙いを定め、伸びていった。その先にあるのは―――首だ。

草たちは今ではもう簀^す巻き状態になつた男たちを、より一層強く組み伏せさせると、伸びた縄のうちの一本が蛇のように首へと巻き付き、そして一挙に絞めあげた。

白き髪の少年（5）

「う……う……」

草の合間から、手負いの獣のものにも似た、苦しげなうめき声がそこかしこから聞こえてくる。シオンはそれを聞きながら、草原の中へと歩み入っていく。途中で何人かがもがき苦しんでいるのが見えたが、彼は一瞥もくれない。彼の目指す先は、ただ一つだったからだ。

「気分はどうですか？」

行き着いた場所にいた者を見下ろしつつ、抑揚のない声で訊ねた。その視線の先にいたのは、ダコタであった。他の賊同様に草に巻かれながらも、しかし彼は生きていた——というよりは、シオンが故意に命を奪わなかったのだ。

ダコタはその声に気がつく、すっかり憔悴^{こすい}しきった面を上げた。「たっ、助けてくれ！」

身が強張るまでに縛られているため、絞り出したような声で訴えかける。対して、シオンはこの言葉に、ただ小さく首を振るばかり。この反応に、恐怖に染まりつつも、なぜだという気色を含んだ眼で、ダコタはシオンを刮目^{かつもく}して見やった。彼の心中を察したのか、シオンはそれにすぐさま答えてやった。

「あなたは死んで当然ではないですか。先の口ぶりから察するに、あなたは相当の人を殺し、そして奴隷にしてきたのでしょうか。その人たちの悔恨や、無念を思えば、あなただけが、のうのと生きていていい理由があるはずなど無いではないですか。例えあなたの死が、先の人々の負の思念に対する償いとしての代価に見合わないとしても」

言い終わったシオンの鮮紅色の瞳に、殺意だけでなく、別の感情がのぞく。険しさをどこか増したようなその眼の奥では、静かに燃える怒りの感情が読み取れた。

だが、ダコタも必死だった。そのように諭^{さと}されただけで、彼が自らの生に対する否定を、そう素直に受け入れられるほど出来た人間でないことは、想像に難くはない。

「ま、待てよ。俺を殺せば、てめえもその人殺しの一端になるわけだぞ？」

苦し紛れに賊の首魁^{しゅかい}は、シオンの言葉から、矛盾点を見出だしたかのように言う。

だが、そんな戯言のような台詞などで、なびくようなシオンではなかった。

「もうすでに僕は十二人も殺しているというのに、いまさら何を言うのですか？ 別に人殺し呼ばわりをされようが、構いませんよ。それに、目前の下衆を殺して罪罰が下されると言うなら、喜んで僕はそれを受け入れます。それだけの覚悟をもって殺しを行いましたしね」

相変わらずのそっけない、冷たい声だった。

もう交渉の余地などなく、ダコタはこれまでにないほど死を間近に感じて、息をするのも忘れていた。じつとりと不快な脂汗が、体中の毛孔から噴き出し、心臓が早鐘を打ったように鼓動をする。

「何でもする！ だから、頼む！ やめてくれ！」

「あなたに僕が求めるのは、死のみです。あとは何もいりません」
必死の形相で訴えかけるも、その願いはいとも簡単に打ち砕かれた。命乞いはもう純分だと、辟易^{へきえき}した眼を差し向けたシオン。

それを最後に彼はゆっくりと指先を上げ、軽く振りおろした。他同様に、太い綱のような草は、大蛇のようにゆるゆると動き、しかし屈強な力で首を絞めていく。

「ぐえ……いい、ぎいい」

目を剥き、必死にもがこうとする。しかし、もはや体は一分ほど^{いちぶ}も動けはしなかった。最期だと悟ったのか、ダコタは血走った眼で、さも怨めしそうにシオンを睨みつけた。苦しげに息をしながら口から泡を吹き、鬼気とした形相をするダコタ。

常人であれば思わず気圧されたであろうが、シオンはまるでその視線と思念を跳ね返すかのように、無然としたまま、ただ黙ってたたずんでいた。

——グキユリ。

不快な咽のひしゃげると音がすると、ダクタの全身はすっかり脱力し、もう意思など宿していないように、生気を失った目はぼんやりと弛緩した。

終始それを見届けたシオンは、何も発することはなかった。冷徹で、殺気に満ちていた鮮紅色の瞳から、徐々に緊張を解いていく。「ふう……」と疲れたように息を一つ吐くと、黒のロングコートの端と、流れるような白髪が、どこからか吹いてきた風にはためいた。そして彼は、ただ静かに踵を返し、ぼんやりとどこか遠くを見つめるように、ゆっくりとその場を後にしていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8674v/>

Gate User

2011年9月19日03時16分発行